



介護者の約3割が男性という時代がやってきました

スマイル介護

だれにも相談できないという「男性のプライド」。
はたして、そこから脱出する方法とは。
さあ、いっしょになって考えましょう。男性の介護の現場。



ともに担い ともに築く ひとひと 女と男の情報誌

ねっとわあく

2011/3/10 Vol.58



「待ってくれ、洋子」
長門裕之著・主婦と生活社発行・1300円＋税

「洋子、やっぱりいつてしまったのか」
長門裕之著・主婦と生活社発行・1300円＋税



長門裕之さんと在りし日の南田洋子さん。
南田さんの介護を始めた頃。

どんな日々にも必ず喜びがある 介護の中でふと きらめく瞬間を見逃さないように

突然のあつけない "さよなら"

一昨年10月21日に、最愛の妻・南田洋子さんを見送られた俳優の長門裕之さん。認知症を患った妻を懸命に介護する長門さんの姿は、テレビや新聞、雑誌を通して広く社会に伝えられ、多くの反響を集めました。苦労や辛さばかりがクローズアップされる介護ですが、長門さんからは「笑顔」や「ときめき」という言葉も聞け、これからの男性介護のヒントにつながるお話を伺うことができました。

今思えば人生の前半は二人とも健康でした。けれども歳を重ねるとだんだん不具合が出てくる。病気というのは、ひとつ弱みがあるところを突いてくる。次々と、いろいろな病気が出てくるんです。お医者様から、洋子の認知症は直接死に至る病気ではないと言われました。老衰から死に至るまでのプロセスは、まだわからない部分も多いようです。洋子は認知症が進行していく中で、突然のくも膜下出血で倒れ、あつという間に逝ってしまいました。薄れていく意識の中で、最後に僕の二本の指をぎゅっと握ってくれたんです。あれは「ありがとう」だったのか、「さよなら」だったのか。洋子が亡くなって一年三ヶ月が経

ちました。多くの方々に支えられ、励まされてなんとか生きていますが、洋子を失ったことがどうしようもなく悲しく、辛く、不条理で。ただ、あのまま認知症が進んでいたら、洋子はいずれ僕の顔も忘れてしまったでしょう。「認知症の行き先は一人です。洋子さんは、あなたと一緒に連れて行くことができます。そうだった時のあなたを案じて、洋子さんは先にお別れしたのかもしれないね」と後日お医者様から言われ、ああ、そうだったのかなあとも思います。

最愛の妻が 僕だけ待っている

とにかく認知症の進行は早かった。正確にいつからというのは覚えていませんが、2006年の夏に今の家に引っ越してから、状態は日々変わっていききました。言葉が出なくなる。オムツをするようになる。一日の大半を寝室で過ごすようになる。

めました。おならプーでも、お笑い芸人の一発ギャグでも何でもいい。とにかく洋子が笑ってくれるのがうれしくて、次はどうかやって笑わせようかといつも考えていました。そして介護に慣れるにつれて、洋子は今の洋子の世界で、機嫌よく生きています。だと感じるようになりました。そうなる、だんだん洋子のメッセージがこちらに伝わってきます。お風呂に入ろうと言うと「嫌だ」と言う。お手伝いさんはそれを額面通り受け止めて「じゃあ、またにしましょう」と。でも僕は違います。先に自分が入り、湯上がりのさっぱりした顔を洋子に見せて「お風呂気持ちよかったですよ、洋子も入るでしょ?」と。それから、なだめずかしてお風呂に入れると、この上なく気持ちよさそうな顔をしている。洋子は「嫌だ」と言いつつ、本当はお風呂で気持ちよくなりたいと思っている。そこまで汲みとれるのは、長年一緒にいる僕だけなんです。

洋子の世界と 僕の世界をつなげる

ある時は、洋子が箸を使わずに焼き魚を手で食べ始めた。右手が不自由になってきてね。本来なら「だめだよ、お行儀が悪いよ」と言いたいところですが、洋子の世界に入ろうと、僕も思い切って手づかみで食べました。そうしたら、付人やお手伝い

さんも同じように真似をして、みんなで大笑い。振り返ってみると、当時は毎日が自分たちの世界と洋子をつなげていく作業でした。自分たちの一般常識を押し付けず、洋子のやることを否定しない。そうすると、洋子の世界とこっちの世界がつながるんです。不思議なことに。洋子がかつて、僕の父(※沢村国太郎さん)の介護を引き受けていました。その時も、同じ役者である父の尊敬を守り、同じ目線で父の心にとんとん入り込んでいった。「お父さん、今日はもうお世話するの疲れたわ」と洋子が笑いながら言う。父も「介護される方も疲れるんだぞ」と冗談を言う。あの頃の洋子のやり方を、今度は僕がやったわけです。

その人の生き方、暮らし方を よく知る人が 介護するのが望ましい

洋子が認知症になってからの日々は、僕にとっては蜜月の恋人同士のような日々でした。病院で看護師さんがオムツを交換する時、洋子は寝たまま横を向いて僕に体を預けてくるんです。僕が洋子に顔を近づけると、僕の首にきゅつと手を巻いてくる。そのしぐさがなんと可愛いことか。遠い昔の洋子の姿と重なり、正直胸がときめきました。どんなに厳しい状況の中に

そんな洋子家が家の中という小さな世界で安心して暮らせるように、毎日をなんとかやり過ごすことで精いっぱいでした。「どうして洋子さんを医師や専門家に委ねなかったのか」とよく聞かれます。それは洋子が僕だけを見て、僕だけを待っていてくれたからです。洋子は既に自分が「南田洋子」であることを忘れていました。でも常に僕を追い求め、「私はもうどこへも行けないのよ」と言う。若い頃からさんざん苦勞をかけてきた洋子に、そう言われたら、もう。認知症や介護についての知識、ノウハウはまったくなかったけれど、洋子の一番近くにおいて、ぎゅつと抱きしめてあげられるのは僕だけだと。それは確信していました。

一日一回 洋子を笑わせよう

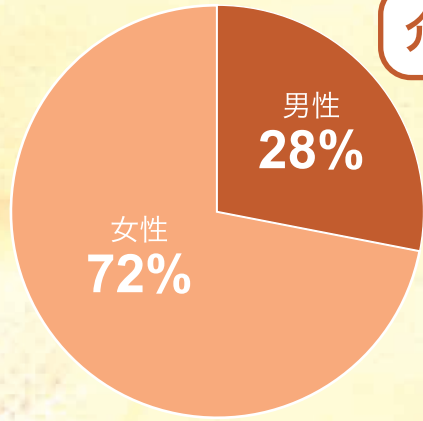
認知症が始まると、うつになる人も多いと聞き、一日一回、洋子を笑わせようという決

も、ほんの一瞬のきらめきや喜びがある。僕は介護の経験を通してそれを学びました。老老介護には、夫婦のそれまでの生きざまが現れます。健康面の問題もありますが、すべてよその方に任せるより、夫婦で面倒を見合うのが一番いいのではないのでしょうか。必要部分は医師や専門家にサポートしてもらいながら、その人のそれまでの生き方や、暮らしの雰囲気をよく知っている人間が、それを大切にしながら介護するのがいいと思います。僕が介護をすると言った時、周りの人たちは皆、「長門さんには無理だ」と言いました。でも僕は、洋子の介護人として世界一だったといえる自信があります。洋子を失い、まだまだ気持ちの揺れる日々ですが、命を与えられている間は、仕事やこういったお話を皆様にお伝えすることで、一生懸命頑張っていきたいと思っています。



2011年1月23日 名古屋御園座の楽屋にて、インタビューさせていただきました。

主な介護者の性



介護者の約3割が男性

同居にて介護を行う介護者（主に介護を行う者）の内、約3割(28%)が男性になっています。

出典：平成19年 国民生活基礎調査

もともと、つらく、先が見えない介護の現場。そこに急増してきたのが男性による介護。さまざまな介護にたずさわる方々に集まっていたいただき見てきたのが「スマイル介護」。

はたして 笑いで介護は救えるのでしょうか。



きをしたのは、昨年の夏だったので、保険の手続きは面倒とか厄介というイメージがありました。でも地域包括支援センターに行ったら、後は全て任せてくださいという感じで、スムーズに進んだのが意外で、手続きはそんなに大変なことではないと分かりました。半年ほどして2度目の認定の時期を迎えたとき、ちょうど仕事が忙しい時期だったので母にケアマネージャーさんに相談するよう勧めました。そうしたら前回私がやったことを全部やっていただけで、すごく助かりました。

飯塚／私は、ケアマネージャーとして仕事をさせていただいています。父が73歳の時に介護状態になったのですが、仕事とプライベートでは、本当に様変わりする体験をしました。例えば、父は、要介護認定申請をすることを拒否しました。理由は、介護認定調査でいろいろと聞かれたりする事への不安からのものでした。初めは、無理強いもできず申請については父の意思を尊重したいと考えました。しかし母は介護を一生懸命やってくれていました。やはり大変だったようで、「普段、介護の仕事をしているのだから、介護申請について説得して…」と頼んできました。最終的には、父の承諾が得られましたが、父の意思、母の介護負担を考えると複雑でした。

家庭によってさまざまな当事者、家族それぞれの介護に対する思い

司会／まず初めにみなさんの介護経験をお話いただけますか。

高岡／私が28歳の時、母が57歳で脳溢血で倒れ半身不随になり、その後何度か倒れました。当時私は親と別居でしたが、まだ独身だったので週に1回くらいは泊まりで母の介護をしていました。それから結婚し両親と一緒に暮らした時期もありましたが、妻は下の子が生まれたばかりで、知り合いの方や家政婦会に頼んで助けていただきました。しかし妻にしてみると自分が仕切っているところに他人が入るので、気苦しさも多かったようです。そういう状況を両親は見て、特別養護老人ホームに入る決断をしました。父は一度は母のところに通って世話をするのが生きがいのようなのでした。10年ほどそんな暮らしが続いて母が亡くなると、2ヶ月後に後を追うように父も亡くなりました。

谷口／介護経験というほどのものではありませんが、現在80歳の父が要支援1で月一回程度の通院の付き添いをしています。まだ自力で生活はできていますが、父と母の二人暮らしですので介護保険の申請や病院にお世話になる時などは私の出番です。初めて介護保険の手続

仕事の中でのご本人やご家族の心情や葛藤について改めて身につまされた思いになりました。

玉井／私は結婚後もずっと実母と一緒に暮らして。母は83歳の時にも膜下出血で突然亡くなったのですが、その数日前に「おしっこが漏れちゃう」と言うんです。私にとって母はいつまでも頼りになる、強い存在だったので、急に老いを感じて戸惑いました。思い返せば、80歳を過ぎたころから大変だと言っていたのですが、身近にいて気付くことができませんでした。

谷口／私のところは父が介護保険の認定を受ければ、送迎サービス付きのリハビリに行けるというメリットを理解してくれたので、申請に対して反対はなかったです。ただ自分がその立場になったとき、私は子どもがいらないので今私がやっていることを夫がやるのかなとか、私が一人になったとき、その手続きを誰がするんだらうと考えるてしまいます。きっと私はいろいろなサービスを利用することになると思います。でも自分も他人の手を借りてもいいと思うけれど、親には娘の私ができることはやってあげたいと思っています。矛盾していますね。

司会／効率などでは割り切れない部分ですよ。高岡さんの時もケアマネージャーさんに入ってもらったのですか。



飯塚哲男さん IZUKA TETSUO

社会福祉法人桂カリタス21居宅介護支援事業所主任介護支援専門員、静岡県立大学短期大学部社会福祉学科非常勤講師

社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士などの資格を持ち、在宅介護のケアマネージャーとして介護の現場に携わっている。また、成年後見制度の代理活動も行っている。



谷口年江さん TANIGUCHI TOSHIE

静岡市女性会館副館長

静岡市女性会館の事業として講座「男性が介護するということ」を主催し、その後受講生を中心に男性介護者交流会を開催。今後もこの輪を広げるための活動に力を入れている。



高岡基さん TAKAGAKI MOTOKI

コピーライター、劇団らせん劇場代表、静岡県演劇協会副会長

福祉関係の企業の広報誌で、介護者や事業者の取材を多数経験する一方、介護サービス情報公表制度調査員、地域密着型サービス外部評価調査員も務めている。



玉井ヨネさん TAMAI YONE

財団法人しずおか健康長寿財団 静岡県介護実習・普及センター所長

看護師・福祉用具プランナーの資格を活かし、介護実習を通して高齢者の健康や介護予防普及事業を担当。地域への介護に関する出前講座のほか、男性の介護講座も開催している。